

中島 雷太

Nakajima Raita [PLPアーキテクチャー 駐日代表/英国登録建築家]

心と体の幸せのための
アウトドア・プレイスメイキング

CONTENTS

特集：屋外環境が注目される商業施設

SPECIAL INTERVIEW
中島雷太氏 1

SPECIAL EDITION
MIYASHITA PARK 5
南町田グランベリーパーク 9

RECENT PROJECTS
渋谷保育園 15
社会福祉法人みのり会 太陽寮 17
星空保護区®認定推進プロジェクト(岡山県・美星町) 19

くらしは文化
国立天文台水沢VLBI観測所 旧緯度観測施設群 21

*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：MIYASHITA PARK

新型コロナウイルス感染症拡大期に、官邸と厚生労働省は集団感染を防止するため、いわゆる3密(密閉・密集・密接)を避けるよう要請を行った。その中では他の人と十分な距離を取るだけでなく、換気的重要性も指摘されている。このため、ソーシャルディスタンスが確保できる広さがあり、換気に神経を配る必要のない屋外環境がにわかに注目を集めるようになってきた。屋外環境を複合商業施設などに取り入れるという試みは以前からあったが、現在アウトモールなどの空間が衆目を集めている。四季に恵まれた日本では、屋外環境を取り入れ自然を有効利用すれば、より素晴らしい環境が提供できると思われる。青年期から欧州で学び、欧米・中近東・東南アジアで大規模プロジェクトの設計を担当されたPLPアーキテクチャー駐日代表の中島雷太氏に屋外環境の重要性をたずねた。

国や文化によって異なる アウトドアスペースの考え方

— どのようなプロジェクトを手掛けられてきたのですか。

当社はロンドンの建築設計事務所ですが、ヨーロッパを中心に中近東やアジアでプロジェクトを進めています。ロンドンで気心の知れたお客さまと仕事を進める場合、提案を実現して行くことはさほど難しくありませんが、中近東やアジアで仕事をすると、文化や生活習慣が異なるので、良いデザインの建築を提示するだけでなく、考え方を調整して建築として完成していくことが難しいのです。

建築による環境づくりは、その土地の文化や風土に根ざしているもので、国や文化が異なると環境の捉え方や利用者の想いも異なってきます。設計には世界共通のデザインや方法論があるわけではなく、その土地や文化にあった、その土地にくらす人たちに心地よい環境とは何かを理解して、適切な提案をしていく必要があります。とくに、アウトドアスペースに対する捉え方は欧米と中近東・アジアとではまったく異なります。

ヨーロッパ、特に北ヨーロッパでは寒い冬が長く続くので、建築は自然との共生というより、いかに自然をコントロールするかという考えに基づいています。こうして、石や煉瓦で自然と屋内空間を遮断する手法がとられてきました。このため、冬に暗く冷たい雨が降り続くロンドンでは、短い夏の期間は屋外に出て、アウトドアスペースを貪欲に楽しむことになります。初夏になり昼間の時間が長くなると「待っていました!」とばかりに皆が屋外に出て太陽の恩恵を受け、仕事の後には屋外のパブでビールを飲み、芝生でくつろぎます。そして週末ともなると、家族揃って出かけて自然を楽しむのです。また、ヨーロッパの国々には、一番暗くて陰鬱な時期である2月にスキー休みという1週間の休日があります。なぜあえてスキーに行くかというと、アルプスの高い山の上に出て日光を浴びるためなのです。陽の当たらない冬でも、その1週間は雲の上で日光を浴び、自然とふれあうことを、彼等はとても大事にしているのです。

インドアに組み込まれた 中近東のアウトドアスペース

— 中近東ではどのように捉えられているのですか。

中近東では、とくに暑い湾岸地域やアラブ首長国連邦のアブダビにいたのですが、現地は真夏だと日中の気温が50℃にもなってしまいます。スペイン南部でもそうですが、日中に外にいないのは非常識という文化なのです。当然昼間に外にいない人はいませんし、道を歩いているのは仕方なく歩いている人ばかりです。そこでは、インドアスペースをどのようにアウトドアスペースのように使うことができるかが重要になってきます。

よくあることですが、ヨーロッパのデザイナーが中近東でまちづくりや環境設計を行うと、アウトドアスペースのようなものを設計してしましますが、まったく使い道がありません。ご存じのように、現在はアブダビやドバイ、湾岸の大きな街には巨大なショッピングモールが、たくさんあります。ショッピングモールはアメリカンスタイルですが、アメリカで見られるような単なる商業施設ではありません。車で出かけて、本来はアウトドアでやりたいことをインドアで楽しむ仮想空間のようなスペースとして造られています。2008年に世界最大のショッピングセンターとしてオープンしたドバイモールでは、朝の開店前にジョギングできるアクティビティクラスがあります。モールの廊下を周回できるジョギングコースを設定し、そこを走りたい人に開放しているのです。

逆に、陽が落ちると外に出てカフェで時間を過ごすという、ヨーロッパ的なカフェ文化が中近東にも根付いています。パリのカフェ文化とは知識人が集まってサロンのように多様な意見を交わす知的な場で、人びとの憩いと社交の場です。ストリート側にカフェテラス席が並んでいます、それはただお茶を飲んだり食事をする目的だけでなく、自分をディスプレイする場所でもあるのでしょう。中近東にも同じようなカフェ文化があって、とくに中近東の男性は午後から夜にかけてカフェで水タバコを吸いながら、バックギャモンのようなボードゲームをして、友達が来ると紅茶を飲みながら歓談して時間を過ごします。中近東ではアウトドアスペースはアクティブに運動するのではなく、そこで社交を楽しむという、ゆとりある文化があるのです。

時間も屋外空間も 自由でゆとりある使い方に

— 日本人はアウトドアスペースをどのように利用していますか。

日本でアウトドアスペースが有効に使われないのは、時間の使い方にまだまだゆとりが無いことが関係しているように思えます。ある意味、真面目なのかもしれませんが、就業時にカフェで過ごしているとサボっているように受け取られがちというのでは、カフェテラスに座ることはできません。また、休暇で旅行に行っても過密スケジュールを組んでこなすというのでは、アウトドアスペースを楽しむ時間も生まれてこないでしょう。欧米人はバカンスでどこかに行くと、そこでぼけっとしたり、本を読んだり、一日中しゃべって時間を過ごすというような、



中島 雷太氏

1993年米国ミズーリ州ワシントン大学建築学部修了。1997年英国ロンドン建築協会（AAスクール）ディプロマ課程修了。2001年英国建築家資格取得。英国王立建築家協会会員。
1997年から11年に渡り英国ロンドンで建築家として活動。英国国内プロジェクトに始まり、ヨーロッパ、中東諸国での多数プロジェクトに携わる。主な担当プロジェクトは、ヘロンタワー、ボンドストリート・クロスレール駅、ペイルート・マリナタワーなど。
2008年からアラブ首長国連邦アブダビで現地プロジェクトマネージャーとして、主にクライアント/プロジェクトチームコーディネーションからデザインマネジメント/施工監理全般に関わる。1年間のシンガポール駐在を経て2013年に帰国。
2017年7月からPLPアーキテクチャー 駐日代表として、日本国内プロジェクトのプロジェクトマネジメント、調整業務、ロンドン設計チームとの連携などを主に担当する。

何もしない時間を大切にします。それが、アウトドアスペースを楽しむ時間にもなっているのです。海外に長く居て戻ってくると、日本には、与えられお膳立てがされていることが多すぎるように感じます。

アウトドアスペースでもよく似た傾向があります。私たちはキュレイトッドやテイラードという言い方をしますが、日本では仕組んでお膳立てをしないと満足されないようです。もっと、自分から想像力を発揮して使い方を考えるような空間提案があっても良いのではないのでしょうか。

アウトドアスペースやランドスケープを設計する場合、欧米では利用者がそこでピクニックをしたり読書をするなど、自分に合わせて使えるように、芝生を一面に張っておいたりします。これに対して日本では設計者が「ここはこういう場所」と作り込むことが多く、そうしないと真面目な日本人は「芝生に入ってはダメなのかな」などと考えて、自由な発想で自分なりにその場所を楽しむことができないようです。

それは、いろんな意味でもったいないことです。日本の自然は他の国に比べると非常に豊かで、四季によって変化する自然と共生する文化も持っています。そういう国だからこそ、周辺に溢れる自然を自分の生活に取り込んでいくことが重要ですし、自分が心地よいと感じるものを、自分のライフスタイルで楽しむべきだと思います。

そういう意味で、日本の設計者は作り込み過ぎるのではなく、利用者の想像力に任せてコントロールしないアウトドアスペースをどれだけ造れるかが鍵だと思います。日本の公園は「やってはいけない」リストが多く、魅力的ではありません。また、「進入禁止」「撮影禁止」などの看板も多いのです。ダメダメで場所を定義するのではなく、ユーザーに任せるべきなのです。ヨーロッパでは、まちの中に大きな公園がありますが、そのような看板は一切ありません。利用者のモラルに基づいているのですが、日本で同じようにすることは、それほど難しいことだとは思えません。

屋外環境を楽しむことは 生活を楽しむこと

— 日本では屋外を楽しむという考え方が少ないのでしょうか。

都市の中におけるアウトドアスペースの使われ方でいうと、ヨーロッパは日本と比べるとウォーカブルで、さまざまな場所に歩いて行けるということを重要に考えています。ロンドンでもカフェや憩いの場など、歩いて行けるところは非常に多くあります。通勤でも、少し歩いて寄り道をしながら帰ることが自然のように、歩くことが中心のアウトドアスペースとなっているように思います。ヨーロッパにおける通勤は、どちらかというとラグジュアリータイムというか、そこでいかに自分を取り戻すか、そこに1日の安らぎを求めるところがあるように感じます。

それに対して日本では、通勤は苦痛で、なるべく早く終わらせたい苦行になっています。これまで長時間かけて都心に通勤して帰るという働き方のモデルがあったのですが、今年の新型コロナウイルス感染症で緊急事態宣言が出され、住宅がもう一つのワークプレイスとして社会的に認められるようになりました。必ずしも「オフィスにいないれば仕事は成り立たない」ということではなく、カフェも含めたワークプレイスの選択が街中にあふれるようになりました。そうすると、地方都市に住めばウォーカブルなくしが可能になり、緑豊かなアウトドアスペースで楽しめる時間も増えてくるのではないのでしょうか。

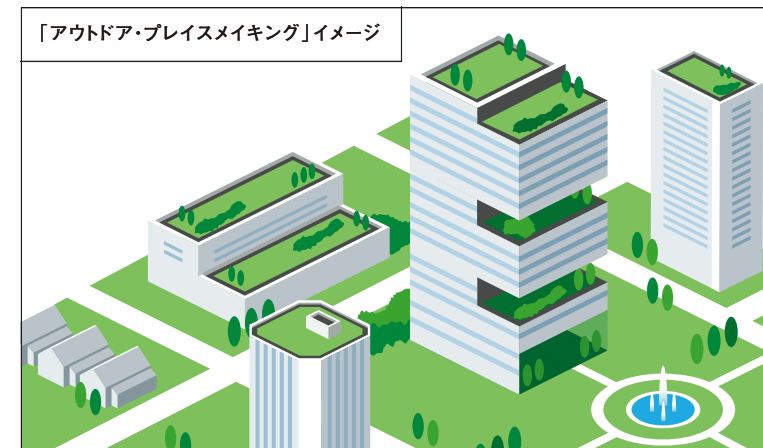
私はスイスのジュネーブにも住んでいたのですが、そこでは車で15分も移動すれば緑あふれる場所に行けました。まちのすぐ近くまで森が広がっているのです。ニューヨークのマンハッタンも島を出れば鬱蒼とした森が広がっており、裕福層はそこに邸宅を構えてマンハッタンで働いているのです。それだからこそ、美しい四季の移ろいがあり、自然とともに生きる文化がある日本のアウトドアスペースは、大きな可能性を秘めていると思います。

最終的な目的は 幸福なプレイスメイキング

— アウトドアスペースは人に欠かせないのですね。

コロナ禍では換気の重要性が指摘されましたが、アウトドアスペースが人にとって重要なものと改めて見直され、実証されるようなことがあれば、オフィスビルでも中間階に自然を楽しむ空間を造ることが推奨されるようになるかもしれません。

当社もこのような試みを推進しており、高層ビルに大きなアトリウムを連続して設けるなどの提案をしています。高層ビルを地上と隔離した場所として空間を造るのではなく、まちを上方に持ち上げて積み上げたようなものと考え、まちにある公園やアウトドアスペースはビルの中に組み込まれて行きます。40階建てのビルで働いたり生活していても、地上と同じように公園を楽しめる場所をつくるのが大切なのです。脳科学的な実験で、視野の中に緑が入ると生産性が上がるという結果が得られているそうです。また、オランダではオフィスビルの執務室には必ず自然光が当たらないといけないと法律で決まっています。このように、人間はフィジカル・メンタルともに自然とふれあうことが大切だと考えられています。これがウェルネス、つまり心と体の幸福につながるのではないのでしょうか。ヨーロッパではこれは社会的に守るべき規範と捉えられていて、建築設計や環境づくりにも反映されています。



これまでの開発では、商業施設を造って、そこにどれだけ集客できるかが主眼でした。しかし当社では「プレイスメイキング」を重視しています。これは施設のデザインだけではなく、どのような場を造りだすかに主眼を置いた提案です。人がその場所でどのような行動をし、どのような生活の営みをするのか。最終的には、そこで時を過ごすことで少しでも人びとのウェルネスにつながるのか…究極的に言えば、どのように幸せになれる空間を造れるかが課題なのです。

これは施設だけで完結することではなく、周辺のアウトドアスペースやまちという、面として捉える必要があります。施設やまちとのつながり、そのまちの文化も含めてウェルネスを広げる提案を、今後もめざしていきたいと思います。

— ありがとうございました。